

## 第十二講 井上論文

はじめに

軍人皇帝時代、元老院が軍隊の要請を受けて自らの仲間から皇帝を選出したのは「例外」として多くの研究者によって片付けられてしまっていることに対して、本論文の著者はその原因をアウレリアヌス暗殺が軍隊全隊の承認を得たものでなく、一部の人間の行為であったためであったと論じる。

そうするとこれまでの皇帝暗殺が全て軍隊の総意に基づいて実施されたということになるのか。しかし、それは証明されていない。しかも、一部の軍人によるアウレリアヌス帝殺害ということが例外的事例ということになるのならば、多くの研究者がタキトゥス帝を元老院が選出したことを「例外」と評価していることを批判することにならないのではないか？

このように本論分はその問題設定における決定的な欠陥を包含していると言わざるを得ない。

275 年秋 皇帝アウレリアヌス暗殺 ビザンティウム近郊の小さな村にて  
(116)

軍隊が、元老院に新皇帝選出を要請

最初、元老院は軍隊の要請を拒む

最終的に筆頭元老院議員のタキトゥスを皇帝に選出

元老院の権威が地に落ちていた軍人皇帝時代には極めて異例の事態

何故、このような不可解な事態が生じたのか (116)

先行研究は例外扱いをするだけ

タキトゥス帝自身は遠征先の小アジアで、病死、或いは兵士の造反によって、僅か半年で殺害されてしまった→一連の短命な皇帝に過ぎない (117)

タキトゥス帝の登極そのものを重視し、それが何故起こりえたのかを問う

研究史

事実関係をラテン語史料に基づきながら単に叙述して来たに過ぎない

= 「元老院の反動」、「例外」、「エピソード」

当時のローマ帝国の状況にこの事件を当てはめようとする試み

ロストフツェフ：軍隊が元老院に皇帝選出を要請＝都市ブルジョワジーの牙城であった元老院の農村プロレタリアート化＝軍隊化（118）

元老院と軍隊が同質化していたので、皇帝選出に関して両者の意見は一致していた

サイム：ギリシア語史料に依存して、タキトゥスの元老院選出を記すラテン語史料を否定

タキトゥスは元老院議員ではなく、ドナウ軍団の退役將軍

近年のプロソポグラフィ研究：元老院構成員の本質的な変化は認められない

サイム説の検討の要

ギリシア語史料とラテン語史料

サイムが依拠したギリシア語史料＝ゾナラス：12世紀に著わされた

現在では失われた価値の高いギリシア語史料を使用

「タキトゥスがアウレリアヌスの後を継いだ。老人であった。タキトゥスは、帝位についたとき、75歳であったと記録されている。軍隊が、その場にいなかったタキトゥスを皇帝に宣言した。というのも、その時、タキトゥスは、カンパニアに滞在していたからである。だが、その地で、元老院議決を受け取ると、私人の服装でローマ市に入り、元老院とローマ人民の意思に従って、紫衣を纏った。」

サイムは「軍隊が、その場にいなかったタキトゥスを皇帝に宣言した。」を論拠にタキトゥスを軍隊の候補者と解釈する（119）

しかし、サイムはゾナラスのそれに続く「だが、その地で、元老院議決を受け取ると、私人の服装でローマ市に入り、元老院とローマ人民の意思に従って、紫衣を纏った。」を無視している（中井）

以上のサイムの解釈に従うならば、軍と元老院の間に複数回のやり取りはなかったことになる(120)

はたしてギリシア語史料は正確か:

ギリシア語史料はタキトゥスが軍隊によって選出されたということを証言しているのか(120)

『ヒストリア・アウグスタ』のゾナラスに酷似した箇所:「非常に多くの者がその著書の中で、タキトゥスは、皇帝に指名された時、その場に居らず、カンパニアに居たと記していることを此所で無視すべきではないだろう。このことは、実際、真実であり、私は秘密にしておくことができないのである。タキトゥスが皇帝になるべきであるという噂が広まった時、タキトゥスは引きこもり、2ヶ月の間、バイアエに居たというのであった。しかし、そこから引き出され、あたかも本当に私人であるかのように、あるいは帝権を受けることを拒否した者であるかのように、この(自身を皇帝に指名する)元老院議決の関与したのであった」(HA, Tacitus, 7, 5-7.)

ラテン語史料に見られる、空位期間も群と元老院のやり取りも記されていない

クロノロジー研究から半年間の空位は考えられないー

275年10月まで アウレリアヌスは帝位にあった

276年1月 タキトゥスは二度目のコンスルに就任

ラテン語史料の信憑性について:

ウィクトルが原史料を誤解した、と一般には理解されている

ウィクトルはタキトゥスとフロリアヌスの治世は、アウレリアヌスとプロブスという強力な皇帝の間に挟まれた「いわばある種の空位のようなもの」と解されたのを、アウレリアヌスとタキトゥスの間に生じた空位期と混同した(119~120)

『ヒストリア・アウグスタ』のほうは、ウィクトルの誤解を、疑問書を挿入しつつ、引き写している(120)

「非常に多くの者がその著書の中で、タキトゥスは、皇帝に指名された時、その場に居らず、カンパニアに居たと記していることをここで無視すべきではないだろう。」というヒストリア・アウグスタの記事はウィクトルを含む多くの著者が皇帝指名時にタキ

トウスが元老院に居なかったこと、そして元老院においてタキトゥスが受諾演説をしていなかったことを記述していることを示している。その上で、「このことは、実際、真実であり、私は秘密にしておくことが出来ないのである。」と述べていることから、皇帝指名時に、タキトゥスが受諾演説をしたというヒストリア・アウグスタが依拠している文献が間違っていることをヒストリア・アウグスタ自身認めていることになる。

そこでヒストリア・アウグスタは「2ヶ月間」指名と受諾をずらせることによって問題を解決しようとしている。

更に重要なことは、ゾナラス系の伝承をヒストリア・アウグスタが改変した時、「軍隊が、その場に居なかったタキトゥスを皇帝に宣言した」を改変する必要性を感じていなかった(121)。

ヒストリア・アウグスタが著わされた4世紀においては、タキトゥスが話し合いの末、選出されたという点は異論の余地がなかったのだ。(121)

著者が再構成する事件の経過:

- 1: アウレリアヌス帝殺害
- 2: 軍による新帝選出の要請
- 3: 元老院での審議とタキトゥス選出
- 4: 軍による宣言
- 5: 元老院によるタキトゥス召喚
- 6: タキトゥス、軍のもとに向かう

ゾナラスは元老院での審議と選出を省略し、ラテン語史料は軍の宣言からローマへの召喚までを端折っている(121)

ギリシア語史料もラテン語史料も同じ伝承に由来している(121)

### 3. 元老院皇帝タキトゥス

以上、タキトゥスは、サイムが説いたような軍隊の候補者ではなく、元老院の候補者であった(122)

①推薦を要請した軍隊とタキトゥスが滞在していたカンパニアとの距離の問題

何故ビザンティウム近郊にいた軍隊が遠方のローマ近郊、というよりはカ

ンパニアという遠隔地にいた人物を皇帝候補としてわざわざ擁立したのか？  
(122)

ローマ市に駐屯していた近衛軍が擁立したとするブレックマンやチゼック  
の説 (122)

ラテン語史料もギリシア語史料もアウレリアヌス揮下の軍隊が要請したこ  
とは確実なので、ブレックマンやチゼックの説はありえない (122)

②75 歳というタキトゥスの年齢の問題

軍隊はなぜかかる高齢者を皇帝に選出したのか？ (122)

この点に関するサイムの説明は不十分

元老院の関与を考えると不自然ではない→バルビヌスが 60 歳、プピエヌス  
が 74 歳。(122)

高齢者を選ぶのが元老院の「好み」(122) ←好みというよりは元老院の伝  
統とシステムの産物と見なすべきだろう (中井)

プロソポグラフィによる研究←タキトゥスが元老院議員であるか否か  
についての議論がある (123)

276 年の正規のコンスルに二度目のコンスルとして就任 (123)

ゾナラスによると 72 歳くらいで最初のコンスルに就任

アウレリアヌス帝治下の 273 年のコンスルにタキトゥス某が就任

このコンスルが皇帝と同一人物は否かが論争 (123)

元老院議員がコンスルに就任する平均年齢は、パトリキ系で 30~32  
歳、プレプス系で 40~42 歳→72 歳で最初のコンスルに就任するとい  
うことは元老院議員としては考えられない

タキトゥスは騎士身分出身の元老院議員とする説が出てくる

273 年のコンスルは皇帝とは別人←家名のみが記されていて、氏族名  
が記されていないので個人を特定できない (123~24)

アウレリウス=ウィクトルは「コンスル格」の元老院議員と呼んでい  
る。この称号は長年元老院に所属した人物に使われる。

273 年のコンスルはカエキナ=タキトゥスで、皇帝は正規でなく  
補充のコンスルとして既にコンスル職を経験していた。(124)

井上氏はこの説に加担←高齢であったということが根拠  
軍隊経験を持つプレプス系の元老院議員と考えられる。  
元老院議員の二極分化＝文官系と武官系  
プレプス系は軍団長や属州総督として平均 15 年軍務につく  
(124)

253 年（ヴァレリアヌス帝）以降、元老院議員は軍事職から排除  
軍事職の経験のある元老院議員は 275 年時点ではかなりの高齢に  
達していた  
タキトゥスは 253 年以前に軍事職を経験していたと推測（124）

#### 4. 軍人皇帝時代における元老院

どうして軍人皇帝時代において元老院が皇帝選出に関与するように事態が  
生じたのか？（125）

ロストフツェフとは違った意味（つまり元老院の農村化ではなく）で元老  
院の変質が原因（125）

3 世紀における元老院による皇帝進出の事例：

235 年の事件：アレクサンデル・セウェルスの暗殺＞マクシミヌスの選  
出

238 年：元老院による皇帝選出、

244 年：哲学者マルクス選出

253 年：ガリエヌスを皇帝に選出（125）

268 年：ガリエヌス暗殺の報を受け、元老院はガリエヌスの子供たち  
を殺す（126）

クラウディウス・ゴティクスは「元老院の意思」に基づいて即  
位したとするオロシウスの記述（126）

271 年：クラウディウス帝死去の後、元老院はその弟クウィンティルス  
を皇帝に選出（126）

275 年：タキトゥスが帝権を与えられる

元老院は積極的に関与しているのは何故か？（126）

元老院の政治的影響力が著しく減退していたとする通説では説明できない元老院議員の中央政界からの後退は、皇帝が恒常的にローマに居ないということに起因する（126）

皇帝は外征に大半の時間を割かれる（126～127）

皇帝の不在は同時に、在地有力者としての元老院議員の側面を際立たせることになる。皇帝に代わって、元老院議員がサーカスや様々な恩恵を施す。（127）

帝国内の新たな勢力として再編された（127）

つまり、元老院の政治的影響力が軍隊を前に殺がれていったという従来の研究に誤りがあり、元老院議員の在地勢力者化という変質によって元老院は皇帝不在のうちに新たな力をつけ、タキトゥスを登極させたのだ（127）